

ユリノキは新宿御苑へ行っても日本女子大へ行っても、その亭々とした大きさを誇っており、ランドマークとなっているので、ご覧になっている方も多いのではないだろうか。筆者がよく訪問する東京大学小石川植物園では、園の半ばを横切る線のやや北側のプラタナス、セイヨウボダイジュの樹林の一角にあるが、それらは巨木ではあるが樹齢150年を越えるものはない。いずれも明治初期に外国から導入されたものであるからである。小石川のユリノキ (*Liriodendron tulipifera*) の説明板を見ると、ユリノキという名前はこの樹を見た大正天皇によって名付けられたとある。ユリノキの学名の属名はギリシャ語に由来し、まさに「百合の木」であり、英語のチューリップの木 (Tulip tree) は、種小名に相当していることが容易にわかる。なお、Lirio はエジプト語に遡ることができることは、以前見たドイツ語の高山植物図鑑にあった。いずれも、その花が巨木であるにもかかわらず、ユリやチューリップになぞられるような可憐な趣であることよっている (図-1)。なお、和名の一つハンテンボクは、その葉が祭の印半纏様であることによる (図-2)。今回この樹を話題にしたいのは、前回の植物の不思議第22回で、ペルリの艦隊は植物採集も行っていたが、それは東アジアと北米東岸の植生の類似性を解明したいというのが目的であったと述べた。ところが、その例としてミズバショウとスカンク・キャベツを挙げただけだったので、もう少しほかの例も挙げた方がいいだろうということで、ユリノキに注目した。

ユリノキ

小石川植物園のユリノキは5月から6月にかけて花をつけるが、その時期カラスが集まり、花をその周囲に落とすので、一面に花が散らばっている。ユリノキの花には蜜があり、どうもそれはカラスがそれを目当てらしく、集団で学習した結果と思われる。実際、ユリノキの花は相当に蜜を持っているので、養蜂家にとっては貴重な植物であり、アメリカの養蜂家はミツバチの維持のローテーションに入れているとのことである。それらユリノキがわが国に導入されたのは1873



図-1 ユリノキの花

右は小石川植物園のユリノキの花 (東大名誉教授邑田 仁博士提供)、左は筆者撮影

年頃で、導入者は小石川植物園で活動しており、1877年に東京大学が発足した時に員外教授として名前を連ねている伊藤圭介である。彼は教授就任時75歳という異例の年齢で、教育には一切かかわらず、植物園でもっぱら植物調査に従った。この名古屋しょうひやくしゃの菅百社しやうひやくしゃ同人で、シーボルト (P.F. von Siebold) の下でも研鑽を積んだ医師にして老博物学者は、日本の植物を良く知っていたので、彼のところには明治時代になって日本に来ていた外国人が頻りに訪れていた。その中には東京大学理学部初代動物学教授モース (Edward S. Morse) がいるが、その彼は伊藤圭介のスケッチ (図-3) を著書に記している (Morse 1917)。1878年に小石川植物園でその年最初のハスの花が咲



図-2 ハンテンボク (ユリノキの葉より) 筆者撮影



Fig. 114

図-3 モースによる伊藤圭介のスケッチ (Morse, E.S. 1917)



図-4 シナユリノキ
小石川植物園にて（東大名誉教授
邑田 仁博士提供）

いたので、それを本郷加賀屋敷（現東京大学本郷キャンパス）のマレー（David Murray）のところに届けたものであるが、その隣はモースの住宅であったのである。マレーは当時文部省の顧問であり、物理学や数学を専門としているが、アメリカ ラトガース大学から来ていた。明治初期に明治政府の要人が世界各国の視察を一年余にわたって視察を行ったが、その視察団のお眼鏡にかなって招聘されたお雇い外国人の一人であり、彼らは多くが加賀屋敷に住んでいたのである。そして、伊藤圭介はそのマレーよりユリノキの種子を入手し、自宅に播いて、それが発芽してから方々に広がったのである。

ユリノキは、アメリカ東海岸の落葉樹林帯を代表する樹木でペンシルバニア州、ヴァージニア州一帯に森林を形成しており、アパラチア山脈を代表する植物である。その大きなものは30mにも達し、開発により原生林は途絶えたが、有用樹木として広く生育しており、その用途も建築材以外にも多く知られており、薬用にも用いられていたとのことである（毛藤1989）。しかし、この樹は日本には現生しないが、化石では岐阜県、宮城県、岩手県で見出されており、今から2000万年前の新生代中新世には日本にも生育していたことが知られている。従って、北アメリカ東部と東アジアに分布しているというが、現在の日本は除かれることになる。

シナユリノキ

日本ではユリノキの仲間が地質時代に途絶えたが、中国では残存し、四川省、浙江省などで見られ、その分布は、イチョウの残存した地域とかぶるが、その領域は幾分広いようである。その一株は小石川植物園にも植えられているが、花はやや小ぶり、全体に緑色が目立つ（図-4）。その学名は *Liriodendron sinensis* Sargent といい、発見されたのは明治維新のころである。シナユリノキは、日本で化石として発見されているユリノキとは形態的類似性が北米のものより高いので、本来東アジア一帯に生育していたものには類縁性があるであろう。そして、何等かの要因で日本では途絶え、中国では残ったものであるといえる。

なお、ユリノキをヨーロッパに導入したのは、イギリス王

立キュー植物園で訓練を受けたウィルソン（Ernest Wilson）であり、シナユリノキを同定したのは学名に見られるアメリカのサージェント（Charles Sargent）であるが、ウィルソンもサージェントもハーバート大学アーノルド樹木園の関係者であり、サージェントは園長であった。冒頭に触れたように、同園は東アジアと北米東部の植生の類似性の究明に関わっており、その追跡に務めていた研究者であり、いわゆるプラントハンターである。筆者は、この具体的事実を2015年秋にアーノルド樹木園に3日間滞在して、ユリノキ、シナユリノキが並んで生育していることを見て、実感することができた。このウィルソンはやはり東アジアの植物探索の一環で、20世紀初頭に日本列島を南から北へと二回にわたり縦断しており、標本館でその折の彼の記した大部の野帳を見せてもらうことができた。その屋久島から北海道へと北上していく足跡の詳細をつぶさに追跡することができたが、園長のフリードマン（Ned Friedman）教授の助言があったとはいえ、その貴重なノートをすぐ出してくださる体制にはおおいに感心した。なお、彼の残した写真は多量に残されており、それに基づく写真集は日本でも最近複数刊行されている。これは、言うまでもなく日本の植物を北米に導入したことに関係がある。

従って、東アジアと北米東部の植生に類似性があるという通則は多くの植物で認められているが、細部で見るとイチョウは中国大陸にのみ残り、コウヤマキは日本にのみ残った。ユリノキの場合は、北米東部と中国に残ったが、日本では途絶えたということになるだろうが、それら植物の消長には個別の要素があり、未解決の点が多々あるということで、地球の歴史をもっとよく知る必要がある。これをもって今回のまとめとしたい。

文献

- 毛藤勤治（編）1989. ユリノキという木、アポック社出版。
Morse, E.S. 1917. Japan Day by Day, Houghton Mifflin Co.（日本その日その日）